

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

佳作論文 明治期の川柳と都々逸：
『團團珍聞』の投書を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-02-05 キーワード: 作成者: 内野, 真緒, Uchino, Mao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000186

明治期の川柳と都々逸

— 『團團珍聞』の投書を中心に—

内野真緒

はじめに

明治時代の代表的な庶民文芸は何か—このような問いがあったら、まず「川柳」と「都々逸」を挙げてよいであろう。現代では、ともに人情を詠み込む短詩型文学として一部の人々に愛されているが、その歴史は古く江戸時代まで遡る。江戸時代、俳諧の前句附が娯楽化し、大衆向けの懸賞文芸として誕生した川柳と、名古屋宮の宿の遊女らによって唄い出され、全国に普及していった歌謡、都々逸。一見何の関係もなかったこの両者

が、明治時代の代表的な庶民文芸として、ともに挙げられる理由はどこにあるのだろうか。

それは、明治の前期、自由民権運動の盛んな頃に創刊された『團團珍聞』にある。『團團珍聞』は、約三十年刊行を続けた雑誌で、その間継続して投書を書き送っていた。その投書には川柳と都々逸も含まれており、これまで取次ぎを通さなければならなかった川柳にしても、詠み人知らずの拾遺集のみの出版にとどまっていた都々逸にしても、『團團珍聞』の投書は画期的なものであった。川柳と都々逸の投書数は、狂歌や狂詩といった他の詩歌の投書数を圧倒的に上回り、大いに人気を博した結

果、『團團珍聞』が廃刊したその後の時代においても「投書文芸」として新聞などに載せられるようになる。つまり、『團團珍聞』は川柳と都々逸が投書文芸として人々に認識されるようになった原点であるということが出来る。

しかし、『團團珍聞』の投書は、このような歴史的意義を持ちながらも、それについて言及されることは少ない。¹⁾ また、明治期の川柳や都々逸に関しても低俗な表現などから、文学史上で軽視される傾向にある。本稿では、『團團珍聞』の投書における川柳と都々逸はどのような存在であったのか。また、その特徴を明らかにしようとするものである。

一、『團團珍聞』——誌史とその特徴——

『團團珍聞』は、広島県人である野村文夫主宰の諷刺雑誌である。創刊は明治十年三月二十四日で、それから約三十年間刊行を続けた。山口順子によると、この三十年にわたる誌史は、経営者の交替によって、

団々社時代 一〜千百六号

一八七七年(明治十年) 三月二十四日号〜一八七七年

(明治三十年) 四月十日号

珍聞館時代 千百七〜千六百五十四号

一八九七年(明治三十年) 四月十七日号〜一九〇七年

(明治四十年) 七月二十七日号

に分けることができる。²⁾ では、團團社時代と珍聞館時代、時期的な特徴は何があるのだろうか。

團團社時代の一番の特徴は諷刺性が強い点が挙げられる。まず、團團社時代に編集に関わっていた人物を見ると、元官吏であった野村文夫(一八三六〜一八九一年)をはじめとして、幕末には尊皇攘夷の志士であった田島象二(一八五二〜一九〇九年)や、大蔵省を辞職した後に團團社に入社した石井南橋(一八三一〜一八八七年)など、「元政府側」の人物が多い。これらの人物について山口順子は、「新しい官僚制機構から逸脱したデラシネともいえる人々が集まり、彼らの斜めに構えた視点が、『団々珍聞』の諷刺性のバックボーンとなった³⁾」と述べている。

実際に、團團社時代の記事の内容を見ると、自由民権運動期は反官・反士族の色合いが強い。第二七号(明治十年九月二十二日)⁴⁾を見てみると、「当世虚事競」という見立を載せ、その大関に「西郷の新政厚德」、「民権を唱ふる不平士族」を挙げ、民権論を唱える士族を諷刺している。同様に第四四号(明

治十一年一月十九日⁵⁾の「当世贅競」では「我儘勝手な政府」や「玩弄院」などを挙げており、反官の姿勢が強くあらわれている。このように、自由民権運動期における『團團珍聞』は諷刺性を強くもっていたことができる。

その後、創刊者である野村文夫の死を経て、明治三十（一八九七）年四月十七日号から、『團團珍聞』の発行元は珍聞館に替わる。珍聞館の社主は『中央新聞』の社長、大岡育造であった。珍聞館時代の『團團珍聞』は、團團社時代の諷刺性は失われ、巷間の艶聞などが記事の中心となっていく。この頃の『團團珍聞』の内情について、『篤亭金升日記』の明治四十（一九〇七）年六月十七日付につきのような記述がある。

社長團々珍聞の株を、酒井會長、真木痴囊氏と余の三名へ譲られしより、酒井氏社長となりて發行をつづけたるが、財政不振と新社長入社に伴い波瀾を生じ（略）年久しく筆を執りし團々珍聞も一変二変して、今日より新旧社員混戦の紙面と変ず。

新しい社長となった酒井泰醇の傘下に集まる新社員と、篤亭金升ら旧社員との間に対立が起こり、創刊から雑誌を支えた旧社員らは退社、明治四十年に『團團珍聞』は廃刊することになるのであった。

さて、『團團珍聞』の三十年という歴史は、必ずしも諷刺雑誌としての刊行年数ではなかったが、これほど長くの間刊行を続けることができた理由はどこにあるのだろうか。

それは「広い読者層に支持されたこと」と「継続して載せられた投書」にあると考える。『團團珍聞』がどのような読者層に読まれていたのかは、誌面構成から推定することができる。『團團珍聞』の前期の誌面構成は、「茶説」「雑報」「英和対訳」「雑録」「寄書」などである。茶説（社説）は明治維新後の旧藩士たちの不平不満が代弁されており、雑録や寄書には狂詩、狂歌、川柳、都々逸など、さまざまな投書が寄せられた。つまり、『團團珍聞』は知識階級を対象とした政論である「茶説」と、庶民向けで娯楽記事を主体とした「雑録」や「雑報」を載せていたのである。このことから、團團社時代の読者について、山口順子は「社説まで誌面のすべてを理解しうる知識をもつ大新聞的読者のほか、ふりかなつきの雑報を読み、筆をとって狂歌や都々逸でもつくろうかという小新聞的読者」を対象としていたと述べている。しかしながら、『團團珍聞』が諷刺性を失っていくにつれて、読者層にも変化があらわれる。野村文夫が亡くなり、発行元が珍聞館に替った『團團珍聞』の誌面構成は、「茶説」「都々一」「珍報」「漫録」「畫報」「狂詩文」「狂

句」「狂歌」「西洋小話」「笑府」「課題」「笑説」などとなっている。これらを見て分かるのは明らかに小新聞の性格が強くなっていることである。従来は政論を載せる欄であった「茶説」も内容にほとんど諷刺性はなく、単に政治に関するニュースという印象を受ける。以上のことから、團圓社時代は大新聞の読者と小新聞の読者の幅広い読者に対応しており、珍聞館時代は小新聞の読者がかなりの割合を占めていたと考えられる。

投書については、『團圓珍聞』は創刊号から現在残っている最終号まですべてに載せられていた。たとえば、お題が投書家から出され、次号で読者からの回答を載せるといったクイズ形式や、投書数の番付といったものが投書家たちの手によってつくられている。⁸さらに、明治十四（一八八一）年ころから各地の読者が親睦会を催し、互いに作品を披露し合うといった行動を見せるようになる。⁹これらは後に「○○連」といったさまざまな投書家グループをつくるきっかけとなった。山口順子は、¹⁰読者は誌面参加や読者クラブでの交流によって編集者との親近感をもちつづけていた。こうした点が『団々珍聞』の続刊の理由であり、また同時に諷刺性の変化の理由ともなっている（後略）

と述べている。このように『團圓珍聞』の投書欄は雑誌側と投

書家を、あるいは投書家と投書家とを結びつけたのである。

『團圓珍聞』が三十年もの間刊行を続けることができた理由として、幅広い知識人読者層に支持された雑誌であったことを述べてきた。そして、そこには幅広い読者層に対応していた前期も、小新聞の読者を中心となった後期も、一貫して投書が載せられていた事実があった。

次節では、その投書のなかでも毎週数多くの投書が寄せられていた詩歌の投書について詳しく見ていきたい。

二、前期・後期の詩歌に関する投書

ここでは、『團圓珍聞』における詩歌に関する投書とその作家数について調べ、そこから解明されることを記していくことにする。「詩歌」は、一般的には漢詩や和歌のことを指すが、ここでは韻文の総称の意として用いる。

『團圓珍聞』は、諷刺性が尖っていた團圓社時代と、完全に諷刺性が失われた珍聞館時代とは、雑誌の性質を異にするため、二つの時代に分けて見ていく。

『團圓珍聞』前期の詩歌に関する投書は、はじめは「寄書」欄、つぎに「雑録」欄に載せられ、次第に川柳や都々逸、狂歌

などが独立して欄を設けられるようになった。今回は、創刊号（明治十年三月二十四日）から五二号（明治十一年三月三十日）までの約一年間を便宜的に表にまとめた（表1）。表には「川柳」「都々逸」「狂歌」「狂詩」「発句」「替歌」の投書数載せたが、この他にも浄瑠璃、大津絵ぶし、常磐津ぶし、今様、いろは唄や、てまり唄など、さまざまな種類の投書が載せられていた。しかし、それらはいずれも投書数が少なく、一年ほどでほとんど載らなくなるため、表には反映していない。

これを見てみると投書数は川柳、都々逸、そして狂歌、狂詩、発句、替歌とつづいている。

そして、何故このような順番になったのかを考えるため、それらに共通する作家（投書家）数を表2にまとめた。まず、狂詩と替歌の数字を見てみると、狂詩のみ、替歌のみをつくっている作家は多いのに対して、狂詩と川柳や替歌と都々逸というように、狂詩、替歌に加えて他の文芸の作家数はいずれも一桁にとどまっている。このことから、狂詩と替歌は特定の作家によってつくられており、それぞれ独自の作家層をもっていたと考えることができる。

つぎに、川柳について見ていくと、川柳のみをつくっている作家は七七で一番多く、それに加えて川柳と都々逸は一九、川

表1：『團圓珍聞』投書欄中の詩歌の投書数
（明治10年3月24日～明治11年3月30日）

	川柳	都々逸	狂歌	狂詩	発句	替歌
明治10年3月(2)	0	0	0	0	0	0
明治10年4月(4)	0	3	3	0	0	1
明治10年5月(4)	0	5	0	1	0	0
明治10年6月(5)	18	11	15	1	0	0
明治10年7月(4)	14	17	4	0	4	0
明治10年8月(4)	10	5	8	4	6	1
明治10年9月(5)	43	2	9	5	0	5
明治10年10月(4)	9	17	5	5	32	1
明治10年11月(4)	21	5	4	2	31	1
明治10年12月(5)	54	43	1	14	2	7
明治11年1月(4)	32	20	8	20	0	1
明治11年2月(4)	53	35	17	18	0	4
明治11年3月(5)	105	13	12	25	7	7
合計	359	176	86	95	82	28

表2：『團圓珍聞』投書欄中の詩歌の投書における共通投書家数 (明治10年3月24日～明治11年3月30日)

	川柳	都々逸	狂歌	狂詩	発句	替歌
川柳	77	19	9	9	3	5
都々逸	—	37	11	5	4	4
狂歌	—	—	19	2	3	2
狂詩	—	—	—	26	1	1
発句	—	—	—	—	4	2
替歌	—	—	—	—	—	13

[注] 第1号から第52号における詩歌に関する投書数をまとめた。投書数の少ない浄瑠璃、大津絵ぶしやカテゴリー不明のものは表に含めなかった。川柳には狂句の投書も含めた。表1の()内の数字はその号数分を表す。表2について、既出の数字は「—」とした。

柳と狂歌は九、川柳と狂詩も九となっている。つまり、川柳の作家数が投書の過半数を占めており、その川柳作家たちが他の文芸も数多くつくって投書していたことができるのである。

る。このように川柳作家たちの力が強かった点が、團圓社時代の前期の投書における一番の特徴であると考えられる。

一方、『團圓珍聞』の後期では、特に多くの投書が寄せられていた川柳、都々逸、狂歌、狂詩、はうたが独立した投書欄をもっていた。今回は、第一六〇一号(明治三十九年七月七日)から、第一六五四号(明治四十年七月二十七日)の約一年間を便宜的に表にまとめた(表3・4)。表には川柳、都々逸、狂歌、狂詩、端唄のみしか載せていないが、この他にも「課題」という欄に毎週、「冠句」や「一口話」といったさまざまな作品が寄せられていた。

では、はじめに表3を見てみると、投書数が多い順から都々逸、川柳、狂歌、狂詩、端唄となっている。端唄に関しては最後の三か月間は一切載らなくなってしまっていることから、他の四つの文芸ほど投書がなかったのかもしれない。さて、この表3で最も顕著にあらわれているのが、川柳と都々逸の投書数が圧倒的に多いことである。なぜ、川柳と都々逸だけがこんなにも投書数が多いのかというと、それは課題欄が関係している。川柳は「狂体俳句」として、都々逸は「情歌」として、通常の欄とは別に課題欄としても募集がされていた。それに対して狂歌、狂詩、端唄が課題欄で募集されることはなかったのだ。

ある。つまり、通常の投書欄で川柳と都々逸がたくさん寄せられたため、課題欄でも川柳と都々逸を募集して載せていたのだと考えることができる。

そして、表4の川柳と都々逸の作家数を見てみると、團團社時代の前期は川柳作家が一番多かったのに対して、珍聞館時代の後期では都々逸作家が一番多くなっている。また、川柳と都々逸の共通作家数を見ても、川柳作家も都々逸作家も同じ程度の割合で、狂歌、狂詩、端唄をつくっている。このことから、珍聞館時代の後期では、川柳作家に加えて都々逸作家もかなり力をもっていたと考えることができるのである。

前期の團團社時代と、後期の珍聞館時代とに分けて詩歌に関する投書を見てきた。前期では川柳作家が大きな割合を占めていたのに対して、後期では都々逸作家もかなりの割合を占めるようになっていったのである。

では、これらの結果からどのようなことがいえるのだろうか。前期と後期に分けて、それぞれ考察を試みた。

表3：『團團珍聞』投書欄中の詩歌の投書数
(明治39年7月7日～明治40年7月27日)

	川柳	都々逸	狂歌	狂詩	端唄
明治39年7月(4)	113	151	60	31	9
明治39年8月(4)	89	141	55	36	9
明治39年9月(5)	110	173	71	44	8
明治39年10月(4)	136	131	62	38	9
明治39年11月(4)	94	118	60	25	8
明治39年12月(4)	122	162	54	51	7
明治40年1月(5)	140	153	70	44	16
明治40年2月(4)	67	120	66	30	8
明治40年3月(5)	120	152	108	34	10
明治40年4月(2)	77	69	33	18	4
明治40年5月(4)	101	175	48	28	0
明治40年6月(5)	108	247	43	11	0
明治40年7月(4)	109	142	14	6	0
合計	1386	1934	744	396	88

表4：『團圓珍聞』投書欄中の詩歌の投書における共通投書家数（明治39年7月7日～明治40年7月27日）

	川柳	都々逸	狂歌	狂詩	端唄
川柳	122	66	30	4	17
都々逸	—	144	40	4	12
狂歌	—	—	55	11	12
狂詩	—	—	—	58	1
端歌	—	—	—	—	17

[注] 第1601号～第1654号における詩歌に関する投書数をまとめた。ここでは、常に独立して欄が設けられ川柳・都々逸・狂歌・狂詩に限定する。川柳には課題として出された「狂体俳句」を、都々逸には課題として出された「情歌」、並びに「懸賞情歌」も含む。表3の（）内の数字はその号数分を表す。表4について既出の数字は「—」とした。

三、『團圓珍聞』前期における川柳

前期の『團圓珍聞』の投書のなかでも川柳が最も多く載せられていた理由は、川柳と「諷刺」の結びつきに関係すると考え

『團圓珍聞』の創刊間もない頃、その誌面は諷刺性に溢れており、「寄書」欄もその例外ではなかった。特に川柳はほかの詩歌よりも諷刺性に富んだ句が多く載せられている。たとえば、『團圓珍聞』（明治十年五月五日）第七号の「雑録」中の川柳を挙げてみると、

學校はよしあしの子の節なり 笑客

西郷は疝氣兵士の頭痛なり 戦流

熊公は多らい喧嘩を持こまれ 同

といった句がある。^[1]この「西郷」とは西南戦争の盟主であった「西郷隆盛」を、「熊公」は明治十五年に立憲改進黨を組織した「大隈重信」を表している。当代政治状況を取り上げ、きわめて卑俗的にあらわすことによって、明快な諷刺性を獲得していることが分かる。

では、なぜ川柳が最も諷刺と結びつくのかというと、川柳には「うがち」という精神があるからである。川柳の「うがち」について大村沙華は次のように述べている。^[2]

穿ちとは世相の裏面を暴き、人情の機微を捉え、然も之を深く掘り下げるよりは、粋と洒落と諧謔を織りあざない、或は人の意表をついて背負投げを喰わせる類であり、いわば江戸っ子の潤達、明朝、洒脱、楽天或は若干の低俗軽薄

を其の性格とする（後略）

そして、こういった「うがち」が、人の欠点を衝いたとき、あるいは社会の矛盾を衝いた時に、「諷刺」となるのである。つまり、川柳は痛烈な批判精神による「諷刺」ではなく、「うがち」による笑いを目的とした「諷刺」を特徴としてもっていた。そして、こういった川柳の諷刺の姿勢が、「滑稽諷刺雑誌」である『團團珍聞』の特性と合致したのだと考えられる。『團團珍聞』という雑誌の特徴について、杉本邦子が「庶民的な笑いとうがちとくすぐりと軽い趣味とを、文字と絵で描き出した寄席的風格の雑誌」と述べているように、その誌面は諷刺的でありながら滑稽や洒落に満ちていた。そのような雑誌にとつて、川柳は最もふさわしい素材であったと考えられる。

また、川柳界でも『團團珍聞』に載せられた川柳は「団珍調」と呼ばれ、多に人気を博した。「団珍調」は「当世的でホットな題材を主体に、政治の矛盾や社会のアナを、滑稽かつ大胆に諷刺」する点が特徴であり、当時の川柳界の一大勢力であった「柳風調」とは真逆の性質をもっていた。「柳風調」は五世川柳によって提唱された「柳風式法」及び「句案十躰」を基本精神とする川柳で、表現や形式に決まりを持っていた。「団珍調」の川柳は、このような決まりや制約に縛られた「柳

風調」の川柳とは違った新しい流れを川柳界にもたらしたのである。

以上のように、『團團珍聞』の前期において川柳が最も多く載せられた理由は、「柳風調」の川柳が力をもっていた時代のなかで、『團團珍聞』の川柳が「団珍調」として川柳界の新しい勢力となり、さらに、その「うがち」の精神からくる諷刺を特徴とした川柳が、雑誌のもつ性質と見事に重なった結果であると考えられる。

四、『團團珍聞』後期における都々逸

『團團珍聞』の後期の投書において、川柳に加えて都々逸が多く載るようになったことについて、考えられる理由を二つ挙げる。

一つは、詩歌の投書に関する編集に鶯亭金升が関わっていた点。鶯亭金升はもともと『團團珍聞』の投書家の一人で、その投書数があまりにも多いことから、当時主筆であった梅亭金鶯の目にとまり、明治十七（一八八四）年八月十七日に團團社の社員となった人物である。小山郁子によると、幼い頃から川柳、狂歌、俳句などに親しんでいた鶯亭金升は、『團團珍聞』

の社員となった後、狂詩以外の投書の撰を担っており、¹⁵⁾ 編集者兼撰者として活躍した。また、鶯亭金升は『都々逸独稽古』(明治二十五年・博文館)、『情歌万題集』(明治二十八年・團圓社)、『都都逸一千題』(明治三十一年・博文館)といった都々逸集を刊行して、都々逸界において確乎たる地位を築いている。このように、都々逸の実作者でもあった鶯亭金升が詩歌に關する投書の撰者であったことから、特に都々逸欄にスペースが割かれ、多くの都々逸が載せられたのだと考えられる。

二つ目の理由としては、都々逸の作家たちが「連」といったグループを結成して投書をしていたことが挙げられる。この背景には、前述した『團圓珍聞』の特徴である「読者間の交流」が関係している。開かれた投書欄や広告欄によって仲を深めた投書家たちは気の合う仲間同士でグループを結成していく。このグループは「連」と呼ばれ、特に都々逸作家の間で重視されていた。しかし、その作風における主義や調子の差異が起因して、連同士の対立が生じるようになる。『團圓珍聞』第七八七号(明治二十四年一月十日)の「広告」欄においても「近來情味流行なるに随ひ種々の連中起り互ひに自然黨派の事よりして不快となりし傾きあり」と書かれている。その後、第七八八号から「團々連募集」という広告が載せられ、次第にその連員

数を増やしていった。こうして、『團圓珍聞』後期の都々逸は「團々連」という団結力を持った組織のなかで投書が行われ、投書数を増やしていったのである。

そして、この都々逸作家らが「連」を結成していく過程に

表5：『團圓珍聞』投書欄中の詩歌の常連投書家の投書数(明治39年7月7日～明治40年7月27日)

投書家名	川柳	都々逸	狂歌	狂詩	端唄
峰亭紅升	64	77	22	0	2
待里庵	97	22	33	0	0
食三人	146	114	26	0	3
和賀人	245	141	3	0	0
琴廼家梧園	12	95	8	0	0
山藤如洗	0	127	0	0	0

は、他のジャンルの詩歌作家からの影響があつたのではないかと考える。「つくる都々逸」として意識される以前の伝統的な「歌う都々逸」は、歌い手によって屈伸自在な旋律をもっており、作風における規則などとは無縁の文芸であった。それにも関わらず、『團圓珍聞』に投書がされるようになってから、作風の

違いから対立を起こしたり、作風の主義などから「連」を結成するに至っている。この急激な変化の原因は何によるものか。それは、詩歌のジャンルを越えた投書家間の交流によって、俳諧の「連衆」、あるいは川柳の「組連」といった集団の在り方が都々逸作家たちに影響を与えたからではないかと考えられる。さらにいうと、「連衆」や「組連」といった集団を重んじる作家たちが、そういった考え方を都々逸の世界に持ち込んだのではないかと考えられる。

しかしながら、『團團珍聞』の投書に登場する詩歌で集団を重んじるものは和歌、狂歌、俳諧、雑俳など多様にあり、都々逸の「連」がどこから影響を受けたかは定かではない。そのため、その影響関係については憶測の域を出ないが、一ついえることは、都々逸は川柳との共通作家が多いのである(表5)。後期に至っては、前述した集計において総投書数が一〇〇を越える常連投書家のほとんどが、川柳と都々逸、あるいはどちらかを大量につくっているのである。このことから、都々逸は集団の文学、特に川柳から強い影響を受けて、作家人口を増やし、投書数を伸ばしたのだと考えることができる。

まとめ

川柳と都々逸は、それまで別々の歴史を歩んできた文芸であったが、『團團珍聞』に投書文芸として載るようになり、文学史の上で一つの共通点ができた。本稿では、この両者の共通性を見出すため、滑稽諷刺雑誌であった前期の投書と、バラエティ雑誌としての後期の投書について調査・分析を試みた。その結果から、『團團珍聞』の川柳と都々逸について考えられることをまとめる。

『團團珍聞』前期の詩歌の投書では、最も諷刺と結びつきの強い川柳が、滑稽諷刺雑誌の素材として使われた。さらに、『團團珍聞』は開かれた読者欄をその特徴としてもっており、投書家たちは詩歌のジャンルを越えた交流をする。その結果、「連」といった集団を重んじる作家、特に前期で投書家の大きな割合を占めていた川柳作家たちが、都々逸作家たちに影響を与え、都々逸作家の間でも「連」が結成されるようになった。その後、小新聞的読者が大きな割合を占めていた『團團珍聞』後期において、都々逸作家たちは「連」による団結力を深め、投書数並びに作家数を増やしていき、鶯亭金升が撰者をつとめ

たことも相まって、都々逸の投書が多く載せられるようになってきた。このように、投書文芸には雑誌の特性や読者層が如実にあらわれるということができる。「團團珍聞」の川柳と都々逸は、まさに「團團珍聞」の象徴的な文芸であったと考えられるのである。

今後の課題としては、具体的な川柳作家や都々逸作家の素性を明らかにして、川柳が都々逸に与えた影響をより詳しく検証すべきであろう。また、今回は便宜的に「團團珍聞」の最初の一年間と最後の一年間のみを統計結果として表にしたが、雑誌全体を眺めるためにはより広い範囲の統計が必要であると考ええる。以上の点を今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 「團團珍聞」の研究は、「滑稽諷刺新聞雑誌」という観点から鈴木秀三郎、開化期文学としての観点から興津要によって始まる。その後は、戯画や漫画の視点による研究(宮尾しげを、須山一計、清水勲など)や、編集者や出版社に注目した研究(小山郁子 など、さまざまな視点からの研究がなされている。最近では山口順子によって、雑誌の歴史や性質についてさらに詳しく分析されており、「團團珍聞」が明治初期の文学史、ジャーナリズム史において重要な位置を占めている。ことは明確であるが、その投書に関する研究は少ない。

(2) 「團團珍聞」第一巻 北根豊監修・山崎英祐編・「解説」(山口順子)

一頁・昭和五十六年・本邦書籍

(3) 注(1)と同書・「解説」七頁

(4) 注(1)と同書・四二八頁

(5) 「團團珍聞」第二巻 北根豊監修・山崎英祐編・二〇五頁・昭和五十六年・本邦書籍

(6) 「鶯亭金升日記」花柳寿太郎、小島二朔編・一二五頁・昭和三十六年・演劇出版社

(7) 注(1)と同書・「解説」七頁

(8) 「團團珍聞」第四〇八号(明治十七年一月二十三日)や第四五六号(明治十七年九月六日)には「團團投書家鼻競」といった投書家の番付がまとめられている。

(9) 「團團珍聞」第五九三号(明治二十年四月二十三日)に「團々投書家珍睦會景況」といった記事がある。

(10) 注(1)と同書・一〇七頁

(11) 注(1)と同書・一〇七頁

(12) 「現代における川柳の意義」大村沙華・五七頁(『国文学解釈と鑑賞』第一八巻七号・至文堂編・昭和二十八年・ぎょうせい)

(13) 「明治の文芸雑誌」杉本邦子著・九頁・平成十一年・明治書院

(14) 「川柳総合事典」尾藤三柳編・二九五頁・昭和五十九年・雄山閣

(15) 小山郁子「團團珍聞」考―鶯亭金升の日記を通して(その2)―
『共立女子大学文芸学部紀要』第三五集・平成元年・共立女子大学)の四四頁に「団団珍聞」の狂詩文を除く撰の大半を鶯亭金升が行なっている。とある。

(16) 「團團珍聞」二五巻 北根豊監修・山崎英祐編・六五九頁・昭和五十八年・本邦書籍